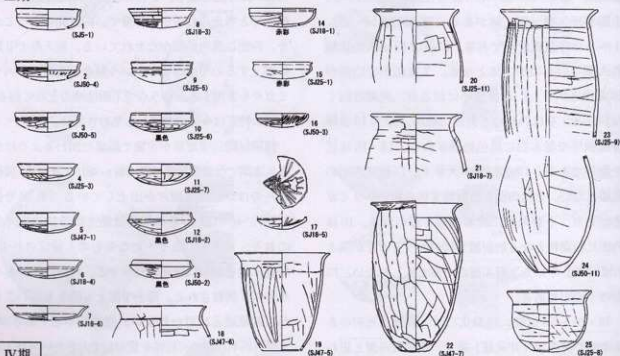
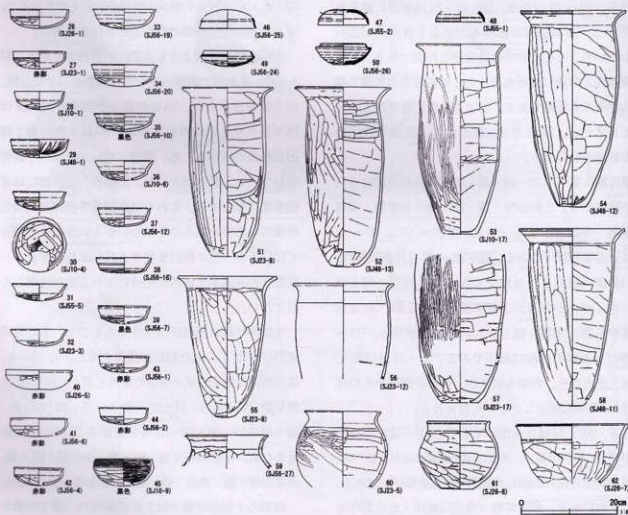


Ⅲ期



Ⅳ期



第208図 荒川附遺跡20次 Ⅲ・Ⅳ期の土器群

含まれる。模倣坏はより小型・扁平化が進み、口縁部の立ち上がりも短くなる。比企型坏は存続するが、口縁部「S」字状のカーブが失われる（続比企型坏化）。口縁部が直立または外反するもの（18～21）と模倣坏系（22～25）、あるいは口唇部沈線を持つ碗形態のもの（26・27）があるが、基本的に口縁部外面と内面に施す赤彩技法は墨守している。

最大の特徴は北武蔵型坏（28～49）と北武蔵型暗文坏（50～61）が新たに出現することである（註2）。北武蔵型坏は深い丸碗形態が主体で、大きく分けると口縁部が小さく内屈するもの（28～35）と、口縁部が内彎するもの（36～43）、小さく直立するもの（44～49）がある。量量にもバラエティがある。北武蔵型暗文坏は丸碗形態で、体部外面へラケズリ、内面に放射暗文が施文されることを通例とするが、50は器形や胎土は北武蔵型暗文坏と同一であるものの、内面の暗文が当初から欠落している。暗文坏系無文坏（富田2002）と考えておきたい（註3）。

62は口縁が外反して開く扁平な坏（皿）である。底部の大半を欠くが手持ちへラケズリ調整と思われる。何よりも口縁部外面と内面全面が赤彩される特徴がいわゆる「落合型坏」に類似する（註4）。落合型坏は7世紀から8世紀にかけて存在する。また、豊島郡衙域で出土頻度が高いことから、「豊島（郡）型坏」と改称すべきとの指摘もある（黒澤1996）。豊島区十条久保遺跡分類ではb2類（亀田1999）、新宿区上落合二丁目遺跡分類のC類（徳澤他1995）に相当すると思われるが、時期的には8世紀前半に位置付けられており、本例とは若干距離をきたす可能性がある。63は模倣坏であるが、深碗風で、内面に粗くて幅広い工具による放射暗文様のへらミガキが施される。北武蔵型の暗文坏とは胎土・形態、暗文の施文状態も異なり、別系譜の土器である。下野系か。64は小型壺。胎土・赤彩から比企型である。

65～72は須恵器坏H身である。65は稜をもつ薄作りのもので、IV期に類例がある。66～72は胎土・形態から東海産、おそらく湖西産の可能性が高い。

73～78は須恵器坏H身である。73は厚ぼったく稚拙な作りで在地産。75も在地産と思われる。産地は不明である。他は東海産、湖西産が主体となろう。79は坏G。東海産と考えられる。

80は坏B。出尻となるかどうかは微妙であるが、湖西産と考えられる。81は脚付盤、82は壺。いずれも産地不明である。上野産であろうか。

83～87は（フラスコ形）瓶。いずれも東海（湖西）産と推定される。

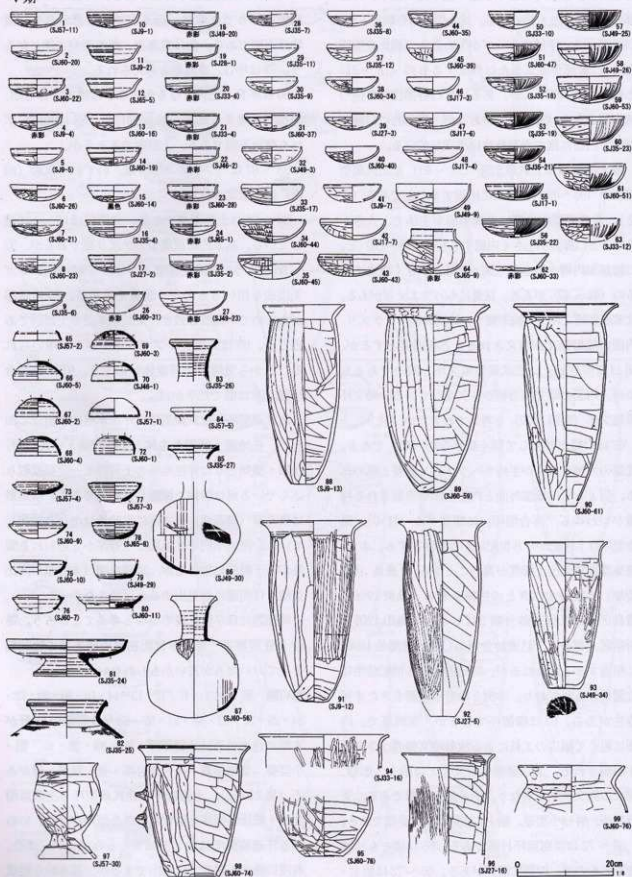
88～96は土師器甕である。長胴化はピークに達している。基本的に武蔵型のケズリ甕であるが、92～96のように胴部外面にへらナデと粗いへらミガキ技法を用いるものが一定量を占める。93は底部が大きめで木葉痕を残す。東関東系譜の土器群であろうか。95は丸胴タイプでへらミガキが用いられることから常陸系の可能性があらう。97は小型台付甕、98は甕で把手が付く。

北武蔵型坏と北武蔵型暗文坏が本格的に組成に加わり、在地産土師器を主体とする段階といえるが、坏類・甕類ともに非在地系の土器群を一定程度取り込んでいる点は前期を踏襲した特徴である。須恵器は東海産（湖西産）を主体に供給量はかなり増加している。産地不明の在地産と上野産かと思われる製品が若干組成に加わるが、武蔵系譜（末野産・南比企産）は明確には見出すことはできなかった。

時期的には7世紀後半中心と考えてよからう。第60号住居跡の一部は8世紀初頭段階までの時間幅を見ておいた方が良いかもしれない。

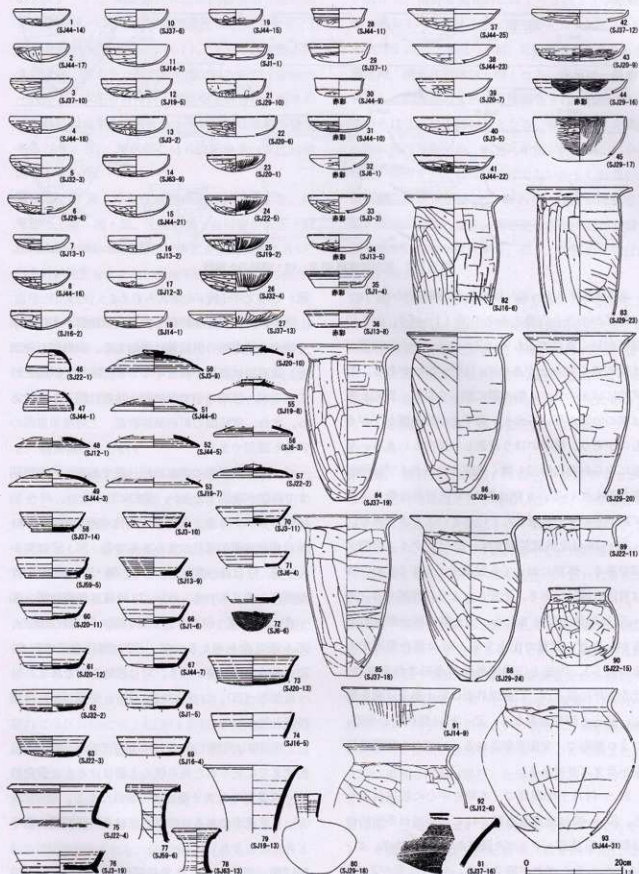
第VI期 第1・3・6・12・13・14・16・19・20・22・24・29・32・37・44・51・59・63号住居跡の18軒が本期に含まれる。土師器坏・皿・碗・甕・壺・甕・小型甕、須恵器甕・坏・高台坏・壺・瓶類・甕がある（第210図）。土師器坏は北武蔵型坏を主体に暗文坏・続比企型坏と盤状坏・落合型坏が伴う。いわゆる坏蓋模倣坏は殆ど消滅するとみてよい。また、有段口縁坏も破片では抽出できるが、基本的な組成からは外れると考えられる。

V期



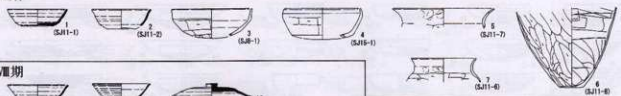
第209図 荒川附遺跡20次 V期の土器群

VI期

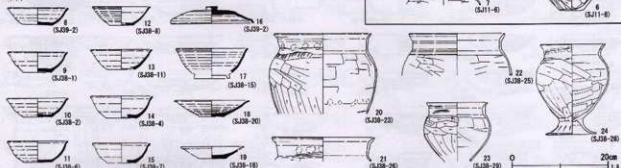


第210図 荒川附遺跡20次 VI期の土器群

Ⅶ期



Ⅶ期



第211図 荒川附遺跡20次 Ⅶ・Ⅷ期の土器群

北武蔵型環（1～22）は大きく3類に分かれ、a：口縁部が小さく内彎するタイプ（1～6）、b：口縁部が短く直立するもの（7～13）、c：口縁部が比較的長く立ち上がるもの（14～22）がある。型式的にはa・b・c類の順に新しくなる。更にc類は腰の位置が高いものと、扁平化が進み腰が下がるものがあり、後者のほうが新しい傾向といえる。Ⅶ期にみられた口唇部を強く内屈させるタイプは殆ど姿を消している。a類は第44号住居跡に多く、第Ⅶ期のものを一定量含んでいるといえそうである。

23～26は北武蔵型暗文環、27は同タイプの暗文皿である。本期においても定量で出土する。28・29は有段口縁環である。上記したように激減する。30～33は純比企型環である。出土数は減少傾向にあるが、まだ、定量で出土する。34は落合型環である（註5）。内面と口縁部外面が赤彩される点は、比企型環に似るが、口縁部外面に粘土巻上げ痕を残し、胎土と形態が異なる。35・36は盤状環である。ロクロ整形で、全面赤彩される。いずれも底部手持ちヘラケズリである。

37～44は土師器皿で、本期を中心に組成に加わる。37～40は北武蔵型皿、41については器形的には似るが、底部ヘラミガキ調整され異質である。43・44にもヘラミガキが施される。44は赤彩がある。南関東系譜と考えておきたい（註6）。45は在地（武

蔵）の暗文環（碗）と考えられる。

該期以降は末野窯跡群と南比企窯跡群が本格操業を始め、須恵器の供給量は増加する。東海産（湖西産）須恵器は瓶類や高台環などまだ定量で供給されているが、該期の中で供給停止状態に陥るようである。また、常陸国の新治窯跡群産、上野産須恵器の供給も確認できる。

46・47は湖西産の須恵器環H蓋である。一応該期まで存在が確認できるが、量的には少ない。48～53は須恵器かえり蓋。末野産と南比企産がある。54・55は南比企産の環状つまみをもつ蓋。56・57は無かえり蓋。57は湖西産と思われる。58・59は高台環で、湖西産と考えられる。60～73は須恵器無台環。60～62は末野産、63は新治窯跡群産、64は秋間産、65も西毛産と考える。66～72は南比企産である。72は静止糸切り痕が残る。73は産地不明である。

長頸瓶（77）、フラスコ瓶（78）、平瓶（80）は湖西産と思われる。

土師器甕は長胴化のピークは過ぎている（82～88）。前期までに見られた異系統の土器はほとんど姿を消し、武蔵型のケズリ甕に統一されてくる。壺（92・93）も武蔵型である。時期的には8世紀初頭～前半と考えておきたい。

第Ⅶ期 第8・11・15号住居跡の3軒が本期に該当する。須恵器環、土師器環・甕・小型甕がある（第

211 図 1～7)。須恵器環は底部回転糸切り後無調整であるが、口径に対する底径比が 0.53 と大きく、扁平な器形を保っている (1)。3・4 は大型の環または鉢。あまり一般的な形態ではないが、赤熊浩一氏による本庄市古井戸・将監塚遺跡分類・編年の壊し類に相当すると考える。土師器壺は武蔵型壺である (5・6)。年代的には 8 世紀後半～9 世紀初頭頃となろう。

第Ⅷ期 第 38・39 号住居跡の 2 軒が該当する。須恵器環・蓋・碗・皿、土師器壺・台付甕がある (第 211 図 8～24)。須恵器環は南比企産に類似するが、白色針状物質を含まない産地不明の一群を多く含む。底径が比較的大きく、やや扁平な器形のもの (8) と底径が口径の 1/2 かそれ以下に縮小したやや深身の一群がある。高台碗の蓋 (16) と無台皿が伴う。武蔵型壺は口縁部が「コ」の字状を呈する。時期的には 9 世紀中頃～後半 (3/4 期) と考えておきたい。

2. 集落構成について

次に土器編年に基づき、集落の変遷を跡付けておきたい。国道 122 号関連で調査された今回報告の 65 軒と前回報告 1～3 次分 97 軒、合わせて 162 軒を対象とした。路線幅の調査という制約があり遺跡全体の様相に敷衍するのは躊躇されるが、大まかな分布傾向をうかがうことは可能であろう。説明のために、北から南に 1～4 区と仮称する (第 212 図)。

第Ⅰ期 荒川附集落の出現期で、住居跡 12 軒から構成される。北群の 2 区に 5 軒、南端の斜面部 (4 区) に 6 軒と大きく 2 群に分かれる。南群からやや離れて 3 区南域に S J 62 が 1 軒単独で存在するが、遺物がなく時期は確定できない。中央部 (3 区) は空白域が広がっている。

第Ⅱ期 住居跡 15 軒から構成される。北群は 2 区から 3 区北端にかけて、第Ⅰ期を踏襲するように 5 軒の住居跡が作られる。斜面地を中心とした南群 (4 区) は廃絶し、平坦面を中心とした 3 区に進出する。11 軒からなる一群で、北群との間には若干の空白域

が広がる。南群も視覚的には 1～3 次 S J 58・62・66・68 と 1～3 次 S J 87・92・20 次 S J 2・7・61、20 次 S J 64 の 3 単位 (小群) に分割できそうである。

第Ⅲ期 構成住居跡は 5 軒となる。集落は一時的に衰退し、斜面部の 4 区に 5 軒構築され、台地上平坦面からは 3 区に 1 軒のみとなる。谷を意識した集落占地に移行したのか、本当に集落が縮小したのかは周辺の調査を待たねば結論はでないかもしれない。

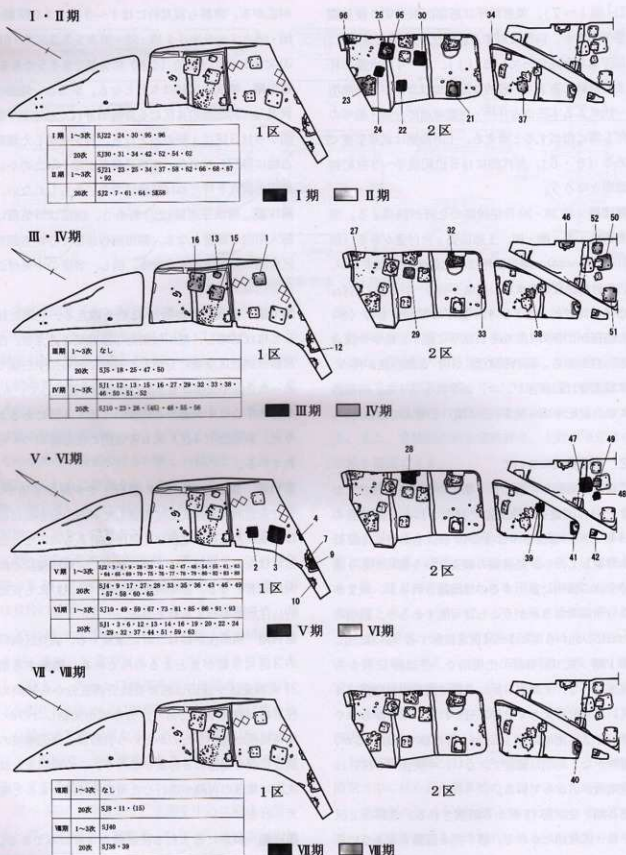
第Ⅳ期 構成住居跡は 21 軒あり、該期以降集落は拡大傾向が顕著となる。第Ⅲ期の谷部中心から調査区全面に分布域が拡大する。但し、3 区の中央付近は空白域がある。

第Ⅴ期 構成住居跡数は 42 軒を数える。前期に比してほぼ倍増し、荒川附集落の最盛期を迎える。住居跡は調査区全域に分布し、前期において空白域であった 3 区中央部にも多数の住居跡が進出している。集落の中心は中央部から南側の 3 区・4 区にあるようだ。斜面部 (4 区) にも安定的に住居跡がつくられている。

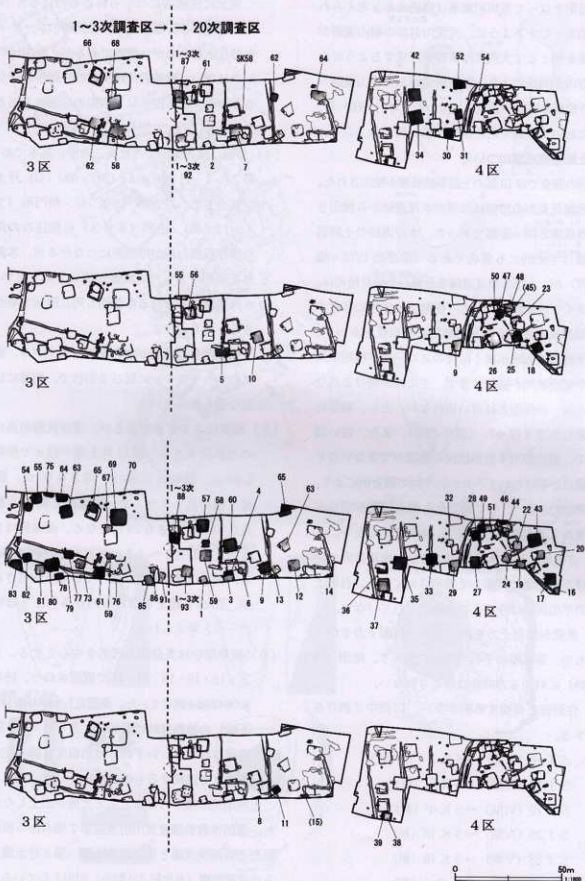
第Ⅵ期 構成住居跡数は 29 軒とやや減少するが、まだ安定的な集落として機能している。分布域はほぼ全域に及ぶが、北群は 1 区で 2 軒あるのみで、2 区にはない。ほぼ 3・4 区に集中し、南群優位の傾向は顕著となる。前期同様斜面部 (4 区) にも安定的に住居跡がつくられている。

第Ⅶ期 構成住居跡は 3 軒に激減する。調査区南群の 3 区に 3 軒がまとまるのみである。隣接する第 21 次調査区や蓮田市教育委員会調査分から該期の住居跡が検出されており、分布域が変動したのか、集落規模が縮小したのかという判断は、周辺地域の調査状況を見極める必要があろう。この時期または次期に集落の再編が進行した可能性は高いものと考えられる。

第Ⅷ期 該期に含まれる住居跡も 3 軒のみである。1～3 次 S J 40 は 9 世紀前半 (第Ⅱ四半期)、20 次 S J 39 は 9 世紀中頃、S J 38 が 9 世紀後半という流れになろう。集落としての衰退傾向は明確にな



第212図 荒川附遺跡の集落変遷



り、該期を以って荒川附集落は廃絶すると考えられる。軌を一にするように、元荒川対岸の梅山遺跡が鉄生産を核として大規模な集落を形成するようになる。寺内正明氏により、荒川附遺跡から梅山遺跡へという集落の移動が想定されている(寺内1989)が、大筋において正鵠を射た指摘と思われる。

3. 土師器焼成墳について

今回の調査では13基の土師器焼成墳が検出された。平面形無花果形の形態は加須市水深遺跡から検出された焼成墳と同一形態であった。水深遺跡の土師器焼成墳は学史的にも著名である(栗原他1972・塩野1977)が、土師器焼成遺構を分類した望月精司は、水深タイプ焼成墳について「伊勢で主体的に存在するA類焼成墳のⅡc類と形態的に類似性をもつが、床面平坦部の形成が狭く前壁のスロープが極端に長い点や壁面被熱が確認できず、主に床が焼ける点などから同一の類型とは言い切れない」とし、類型化に慎重な態度を採った(望月1997)。また、古い調査例で、焼成箇所や被熱状況の確認ができないなどの問題点が挙げられていたが、今回の調査例により、「水深型焼成墳」として類型化し得る特徴が明らかにできたと考えている。以下、概要を示したい。

- (1) 立地的には台地縁辺部にあり、南東方向に開けた斜面地に群集して築造されている。台地上の平坦面には今のところ検出されていない。
- (2) 奥壁が斜面上方を向くもの、斜面下方を向くもの、等高線に平行するものがあり、地形(傾斜)に対する方向性は認められない。
- (3) 住居跡と重複する例が多い。13例中7例存在する。

S J 17 (V期) → S K 1・74 (新)

S J 18 (Ⅲ期) → S K 3 (新)

S J 19 (Ⅵ期) → S K 4 (新)

S J 26 (Ⅳ期) → S K 18 (新)

S J 28 (V期) → S K 16 (新)

S K 47 (古) → S J 49 (V期)

S J 51 (Ⅵ期) → S K 46 (新)

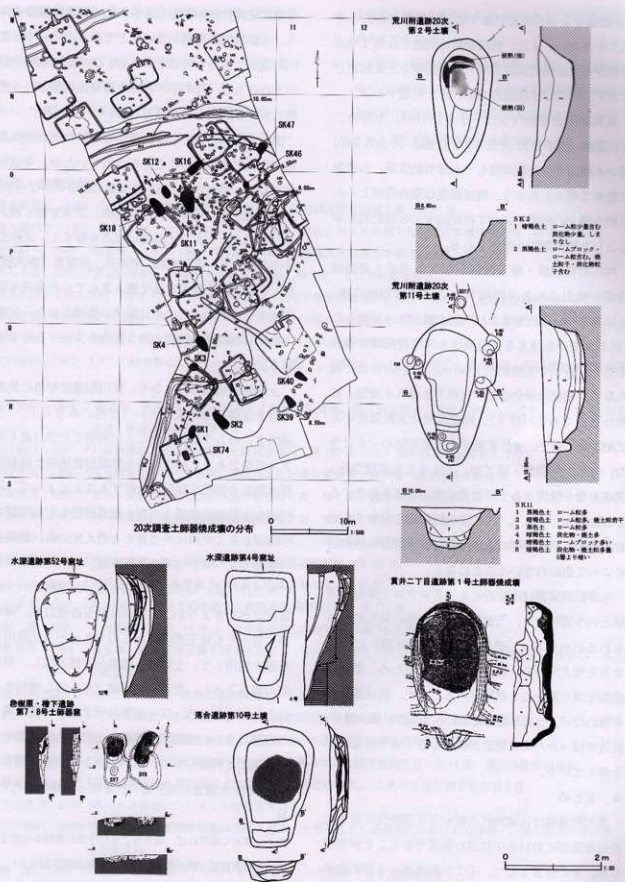
完全に住居内につくられるものはS K 74の1例に留まる。他の例では住居跡のコーナ一部を切り込むものが一般的であるが、理由は明らかではない。時期的にはV期の住居跡に切られるものと、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期の住居跡を切るものがある。

- (4) 形態は無花果形または長三角形が基本である。第2・4・11・16・18・(39)・40・(47)号土壌が該当する。長方形(S K 74)、楕円形(S K 1・12・46)、円形(S K 3)は掘込みの深浅や遺存程度の差が形態差につながるが、本来は無花果形であった可能性が高いと考えている。水深遺跡にみられる多様性も同じ理解で解消できると考えられる。

断面形態は奥壁が急角度で立ち上がり、前部に向かって緩やかに延びる形状で、前部には明確な壁を作らない。

- (5) 規模はさまざまであるが、遺存状態の良いもので計測すると、第11号土壌が最大で縦軸長3.04m、横軸長1.80m、深さ0.90m、第40号土壌が最小クラスで、縦軸長1.68m、横軸長0.81m、深さ0.28mとなる。縦軸長は2~3m、横軸長1~1.5mほどのものが主体となる。深さは遺存程度によってかなり左右されるが、70cmを超える深いものが多いことは特徴の一つと考えられる。
- (6) 被熱部位は奥壁側の底面を中心とする。S K 2・12・16・18・39・47で確認された。特にS K 39は強く焼けていた。奥壁立ち上がり部分(壁下端)の被熱痕跡はS K 2・3・11・46・74で確認されたが、いずれも被熱程度は弱く左右の側壁まで連続するものはない。

土師器焼成墳からはほとんど土器が出土しなかった。蓮田市教委調査荒川附遺跡第7地点から検出された土師器焼成墳と思われる土壌(第1号土壌)からは武蔵型甕(8世紀2/4期か)が出土している(田中1989)。遺構との重複関係と集落の存続期間から



第213図 焼成場の分布と武蔵国内の非ロクロ土師器焼成場

7世紀後半から9世紀代までの間に操業されたと考えておきたい。また、焼成器種は前述した第7地点の例から土師器北武蔵型・武蔵型壺などを想定しておく。それは水深型遺跡のあり方と共通する。

東京都落合遺跡（玉口・小金井1984）上落合二丁目遺跡（徳澤1995）や貫井二丁目遺跡（小金井1986）等から検出された焼成壺も「水深型焼成壺」の壺型に含めて考えられよう。焼成器種は落合型壺とそれに伴う壺で、時期的には7世紀後半～8世紀代を中心とした操業期間と推定される。

神川町皂樹原・櫓下遺跡からは12基の土師器焼成壺が検出された（篠崎1990）。「水深型焼成壺」とは異なり、櫓下形または円形土壌が2つ連結した「だるま形」を呈する。規模は水深型焼成壺よりも小さく、最大でも縦軸長1.50m、深さ50cmに満たない。側壁の半分ほどが被熱する点も水深型とは異なる点である（注7）。焼成器種は北武蔵型・武蔵型壺・壺で、8世紀前半を操業期間の一点に含む。仮に「皂樹原・櫓下型」とすると北武蔵型・武蔵型壺を焼成する土師器焼成壺に2類系存在することになる。つまり、武蔵国一円に広く分布する北武蔵型・武蔵型壺の生産は異なる土師器生産集団によって担われていたことになる。

水深型焼成壺は形態的にも、非クロロ土師器の焼成という意味でも、三重県北野遺跡等に典型的にみられるいわゆる「三角形窯」（A型焼成壺）に類似すると考えている。風の影響を減らすため、奥壁側底面を深く掘ったと推定される。また、焼成壺全体を覆わない、つまり底面付近のみを覆う「覆い焼き」技法を採ったために壁面が被熱しないのではないかと考えている。

4. まとめ

荒川附遺跡は古墳時代中期から平安時代に至る大宮台地東部における中核的な集落であることが判明した。その特質として、①7世紀後半～8世紀前半にかけて集落が最盛期を迎えること、8世紀後半以降は衰退傾向が顕著になり、9世紀後半に消滅する。

②掘立柱建物跡が存在しない。③土師器焼成壺を伴う。④製鉄関連遺構が多いなどである。②～④は荒川附遺跡に独特な特徴といえる。②の掘立柱建物跡の不存在も③・④の示される生産関連遺跡という性格に規定されたものかもしれない。

出土遺物の特徴として、荒川附遺跡は湖西産須恵器が多量に出土することで知られていたが、今回報告でも同一傾向であった。東海産須恵器のみならず、上野産須恵器や常陸（新治窯跡群）産須恵器も搬入されていた。一方、土師器に視点を移すと、比企型壺のみならず、東関東系、常陸系、南関東（南武蔵）など非在地系土師器が定量で搬入されていた事実も明確になってきた。この点は従来の指摘どおり、元荒川を介した流通の結節点的な性格を支持するものである。

土師器焼成壺の存在から、荒川附遺跡が単に農業経営を主体とした集落という性格のみならず、「土器焼き」のムラであったことが判明した点は最も大きな成果である。非在地系土師器が在地土師器に置き換わる過程を詳細に分析することによって、不明確な土師器焼成壺の時期や焼成器種などの問題にも側面からアプローチできると考えている。鉄製品の生産もリンクして考えるならば、荒川附遺跡は古代埼玉評（郡）の手工業生産を担った遺跡という位置付けができようか。元荒川は埼玉政權以来、律令期に至っても埼玉郡の母なる川であった。元荒川の舟運を利用して、土師器・鉄製品の積み出し、須恵器の積み下ろし、売買など川津（市）的な機能を果たしたのであろう。既に紙数は尽きたが、積み残した課題は多い。土師器焼成壺と土師器生産に関しては別稿にて再論したい。鍛冶工房と鉄生産に関しては、第21次調査の報告書刊行を待って検討したい。

註

註1 敢えて挙げれば、埼玉県上里町往来北遺跡から出土した須恵器第IV群が最も類似しようか（富田2006b）。

註2 今回の熊野遺跡131次1・2号住居跡が最古で7世紀3/4期と考えられる（鳥羽他2004）

註3 東北地方で出土する関東系土師器の多くが暗文系無文坏と類似する。

註4 鶴間正昭氏のご教示を受けた。

註5 鶴間正昭・江口 桂氏のご教示を得た。

註6 千葉県佐原市玉造上の台遺跡(旧下総国香取郡)に赤彩+ヘラミガキの皿が出土している(原田1987)が、

主体的とはいえないようで、とりあえず南武蔵系と考えておきたい。

註7 皂樹原・檜下遺跡では鍛冶工房に近接して土師器焼成域が12基群集する。また、隣接地に製鉄遺跡の存在が確実視されており、鉄生産と土師器生産がリンクするという意味で荒川附遺跡と共通性が伺える。

引用・参考文献

- 青木美代子 1984 『赤羽・伊奈氏屋敷跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第31集
- 青木美代子 1985 『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第43集
- 赤熊浩一 1988 『特選塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第72集
- 赤石光資 1988 『愛宕山遺跡』上尾市文化財調査報告 第3集 上尾市教育委員会
- 赤石光資・小宮山克巳 1993 『二十一番耕地Ⅱ遺跡』上尾市遺跡調査会調査報告 第8集 上尾市遺跡調査会
- 赤石光資・小宮山克巳 2004 『尾山台遺跡 第2次調査』上尾市文化財調査報告 第30集 上尾市教育委員会
- 嶋田千花 1999 『第IX章 成果と課題』『十条久保遺跡』十条久保遺跡調査会
- 穴沢義功 1987 『3 土師器窯について—その現状と課題—』『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究會
- 上村安生 1997 『第2章 各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 第3節東海—三重県を中心として—』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 内山敏行 1997 『八幡根遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告 第189集 (財)栃木県文化振興事業団
- 大塚孝司 1984 『江ヶ崎貝塚・荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書 第6集 蓮田市教育委員会
- 大塚孝司 1986 『ささら遺跡』蓮田市遺跡調査会調査報告書 第1集 蓮田市遺跡調査会
- 大塚孝司 1988 『荒川附遺跡』蓮田市遺跡調査会調査報告書 第3集 蓮田市遺跡調査会
- 金子直行・細田勝 1987 『宿上・御林遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第16集
- 金子直行 1997 『戸崎前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第187集
- 木戸春夫 1984 『関戸足利』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第40集
- 木戸春夫 1992 『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第112集
- 栗岡 潤 2005 『大山遺跡(第10・11次)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第299集
- 黒津和彦 1996 『第五章 豊島郡面と律令制下の入びと 第二節入びととの生活と墓』『北区史』通史編 原始古代 北区史編纂委員会
- 小金井靖 1985 『貫井二丁目遺跡』練馬区遺跡調査会
- 小宮山克巳 2004 『秩父山遺跡 第4次調査』上尾市遺跡調査会調査報告 第29集 上尾市遺跡調査会
- 小宮雪晴 1992 『宮の前遺跡—第2調査地点—』埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第13集
- 小宮雪晴・田中和之 2005 『県指定史跡黒浜貝塚』埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第41集 蓮田市教育委員会
- 斎藤良夫他 1971 『高台山遺跡発掘調査報告/大宮市とその周辺の雑類』大宮市文化財調査報告第2集
- 佐々木義則 2000 『武田石高遺跡』ひたちなか市教育委員会
- 佐々木義則 2006 『茨城県における常陸型甕の生産と流通—古墳時代から奈良時代にかけての様相—』国士舘大学考古学会発表資料
- 篠崎 潔 1990 『皂樹原・檜下遺跡Ⅱ』奈良・平安時代編Ⅰ 皂樹原・檜下遺跡調査会
- 立石盛詞 1983 『後張』本文編Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 高橋一夫 1979 『大山』埼玉県立がんセンター埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集

- 田中和之 1989 『荒川附遺跡—第7地点・第8地点— 宿下遺跡—第6地点—』蓮田市文化財調査報告書 第14集
- 田中和之 1991 『天神前遺跡』 蓮田市教育委員会調査報告書 第17集 蓮田市教育委員会
- 田中和之・小宮雪晴 1992 『八幡沼遺跡 第1調査地点』埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書第16集
- 田中和之・小宮雪晴 1999 『馬込八番遺跡 第7・8調査地点』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第26集
- 田中和之・小宮雪晴 1999 『十三塚古墳 黒浜粉地遺跡 第1調査地点』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第33集
- 田中和之・小宮雪晴 2005 『宿下遺跡・宿上遺跡・天神前遺跡・宿下遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第40集
- 田中和之・小宮雪晴 2005 『榑山遺跡 第6調査地点・第7調査地点』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第41集
- 田中和之・小宮雪晴他 1999 『馬込八番遺跡 第7・8調査地点』埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書 第26集
- 鶴間正昭 1990 『奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味』『古代学研究』122
- 寺内正明 1989 『荒川附遺跡—第6次調査—』蓮田市遺跡調査会調査報告書 第4集 蓮田市遺跡調査会
- 寺内正明 1989 『榑山遺跡—第3・4次調査—』蓮田市文化財調査報告書 第13集 蓮田市教育委員会
- 寺内正明 1992 『荒川附遺跡—第10調査地点—』蓮田市遺跡調査会調査報告書 第17集
- 寺内正明 1995 『ささら遺跡 第4調査地点』蓮田市遺跡調査会調査報告書 第23集 蓮田市遺跡調査会
- 寺内正明 1995 『馬込八番遺跡—第6調査地点—』蓮田市文化財調査報告書 第29集 蓮田市教育委員会
- 徳澤啓一・山田美和 1995 『V. 落合型環に伴う土器群の編年—東京都新宿区上落合二丁目遺跡における奈良時代の土器編年』『上落合二丁目遺跡 新宿区上落合二丁目遺跡調査団』
- 富田和夫 1997 『第2章 各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 第3節関東西部—武蔵国を中心に—』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 富田和夫 2002 『熊野遺跡Ⅲ(A・C・D区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第279集
- 富田和夫 2006 a 『北武蔵における他国産須恵器の流通とその実態—上野産須恵器を中心に—』『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古 別冊9 埼玉考古学会
- 富田和夫 2006 b 『律令制成立期における須恵器流通の一様相—八幡太神南遺跡群出土須恵器の検討—』『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会
- 鳥羽政之・市川淳子 2004 『熊野遺跡Ⅲ』同部可教育委員会埋蔵文化財調査報告書 第9集
- 中村合司 1979 『児玉郡における鬼高式土器の編年』『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第38集
- 中村合司 1999 『埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—』『東国土器研究』第5号
- 野中松夫 1981 『釣場 八番 荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書 第2集 蓮田市教育委員会
- 野中松夫 1983 『江ヶ崎貝塚 御殿場遺跡 荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書 第5集 蓮田市教育委員会
- 橋本 勉 1999 『戸崎前Ⅱ/薬師堂根Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第218集
- 橋本 勉 2000 『向原/相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第233集
- 橋本 勉 2001 『向原遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第272集
- 長谷川厚 1996 『古代前半期における関東地方の煮炊具の様相』『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮炊具—』古代の土器研究会第4回シンポジウム
- 濱野一重 1984 『向原・上新田・西浦』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第41集
- 原田亨二 1987 『6 佐原市玉造上の台遺跡』『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- 藤原高志 1983 『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集
- 細田 勝 2004 『原/戸崎前/薬師堂根/相野谷/向原/北』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第295集
- 望月精司 1997 『第1章土師器焼成遺構の定義と型式分類 第2節土師器焼成遺構の分類』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 山本植・細田勝 1985 『原・丸山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第42集
- 横川好富・小川良祐・塩野博 1973 『加倉 西原 馬込 平林寺』埼玉県遺跡調査会
- 渡辺清志 2005 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第307集

写真図版



1 調査区全景 (A区) 北から



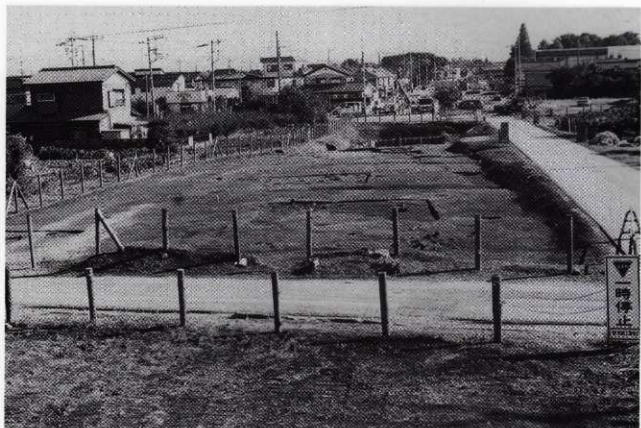
2 調査区全景 (A区) 南から



1 調査区全景（B区）北から



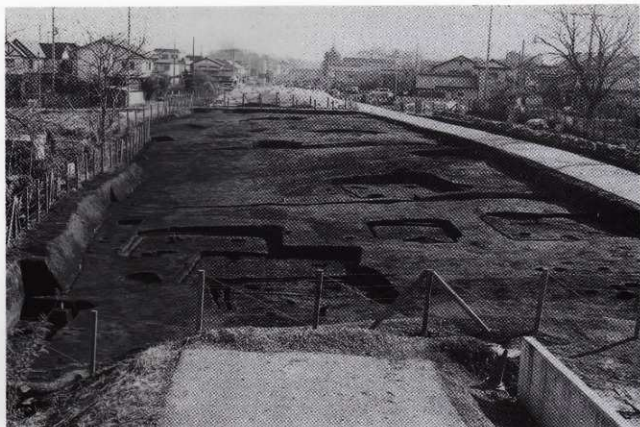
2 調査区全景（B区）南から



1 調査区全景 (C区)北から



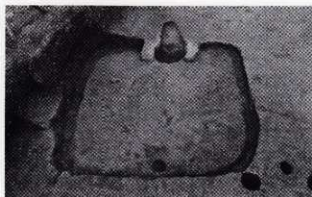
2 調査区全景 (C区)北から



1 調査区全景 (D区) 北から



2 調査区全景 (D区) 南から



1 第1号住居跡



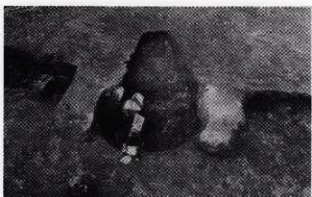
5 第3・4号住居跡



2 第1号住居跡遺物出土状況



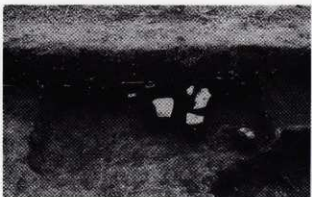
6 第4号住居跡カマド



3 第1号住居跡カマド遺物出土状況



7 第5号住居跡遺物出土状況



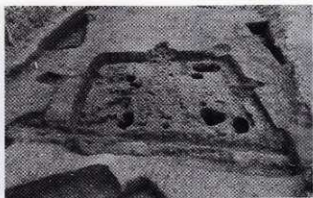
4 第2号住居跡遺物出土状況



8 第6号住居跡



1 第7号住居跡



5 第9号住居跡掘り方



2 第7号住居跡遺物出土状況



6 第9号住居跡遺物出土状況



3 第8号住居跡遺物出土状況



7 第9号住居跡第1号カマド遺物出土状況



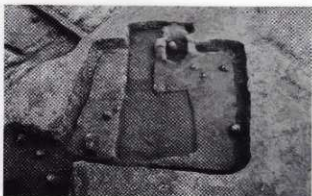
4 第9号住居跡



8 第9号住居跡遺物出土状況



1 第10号住居跡



5 第11号住居跡遺物出土状況



2 第10号住居跡第1号カマド遺物出土状況



6 第11号住居跡カマド遺物出土状況



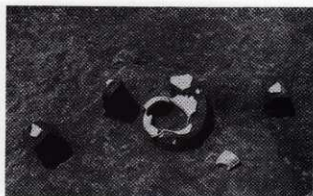
3 第10号住居跡第2号カマド遺物出土状況



7 第12号住居跡遺物出土状況



4 第11号住居跡



8 第12号住居跡遺物出土状況



1 第12号住居跡具層出土状況



5 第14号住居跡



2 第13号住居跡



6 第14号住居跡遺物出土状況



3 第13号住居跡遺物出土状況



7 第14号住居跡カマド



4 第13号住居跡カマド遺物出土状況



8 第15号住居跡



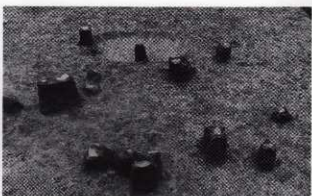
1 第16号住居跡遺物出土状況



5 第17号住居跡遺物出土状況



2 第16号住居跡遺物出土状況



6 第17号住居跡遺物出土状況



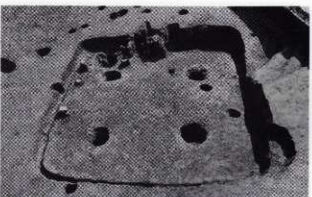
3 第16号住居跡カマド



7 第17号住居跡カマド



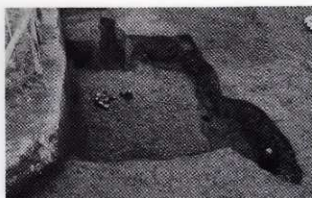
4 第17号住居跡



8 第18号住居跡遺物出土状況



1 第18号住居跡



5 第19号住居跡遺物出土状況



2 第18b号住居跡第3号カマド



6 第19号住居跡カマド



3 第18a号住居跡第1号カマド



7 第20号住居跡遺物出土状況



4 第19号住居跡



8 第20号住居跡カマド



1 第21号住居跡



5 第22・23号住居跡遺物出土状況



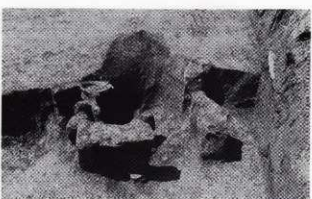
2 第21号住居跡第1号カマド



6 第23号住居跡



3 第22号住居跡



7 第23号住居跡カマド



4 第22・23号住居跡



8 第23号住居跡カマド遺物出土状況



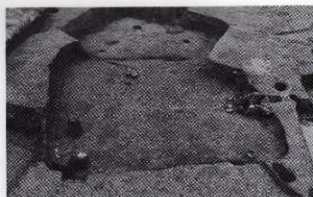
1 第23号住居跡カマド



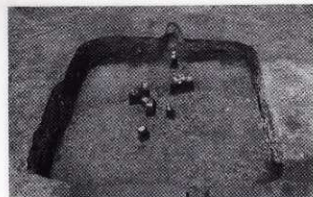
5 第25号住居跡



2 第24号住居跡



6 第25号住居跡遺物出土状況



3 第24号住居跡遺物出土状況



7 第25号住居跡カマド



4 第24号住居跡遺物出土状況



8 第25号住居跡カマド遺物出土状況



1 第26号住居跡



5 第27号住居跡遺物出土状況



2 第26号住居跡カマド



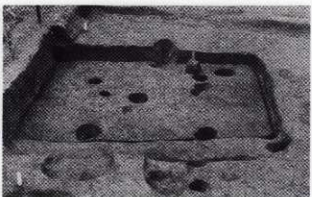
6 第27号住居跡カマド



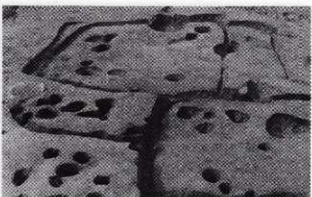
3 第27a号住居跡



7 第28・49・51・54号住居跡



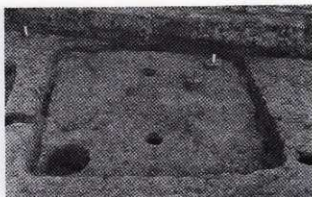
4 第27号住居跡



8 第28・54号住居跡



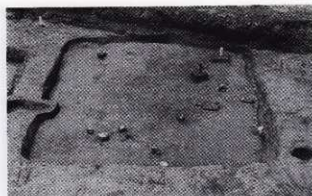
1 第29号住居跡



5 第30号住居跡



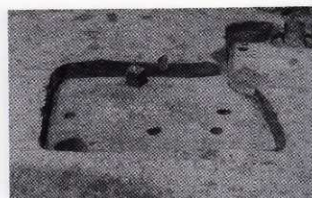
2 第29号住居跡遺物出土状況



6 第30号住居跡遺物出土状況



3 第29号住居跡カマド遺物出土状況



7 第31号住居跡



4 第29号住居跡カマド



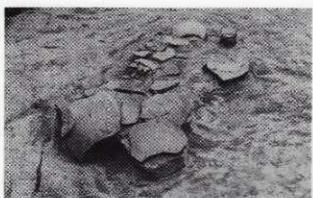
8 第31号住居跡遺物出土状況



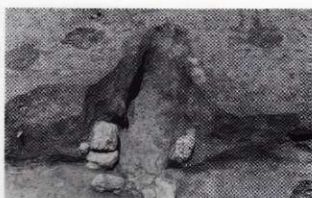
1 第31号住居跡遺物出土状況



5 第33号住居跡遺物出土状況



2 第31号住居跡遺物出土状況



6 第33号住居跡カマド遺物出土状況



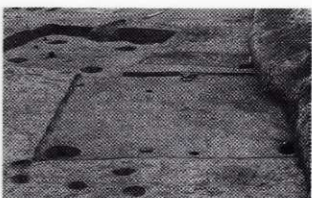
3 第31号住居跡遺物出土状況



7 第33号住居跡カマド遺物出土状況



4 第32号住居跡遺物出土状況



8 第34号住居跡遺物出土状況